



## 家康公と駿府(三)

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなり



狩野探幽が「東照社縁起」に描いた駿府城天守

家康公が次に駿府を拠点とされたのは少年時代から二十年以上経った四三歳になられた時です。信長公との連合で甲斐武田家を滅ぼした直後に駿河の国を徳川領としたのですが、その僅か三ヵ月後に本能寺の変が起こり信長公死去。その後家康公は秀吉公と対立し小牧長久手の合戦となりましたが結局秀吉公の説得を受けて臣従し、漸く遠駿三甲信五力国の大守として駿府城に入られたのは一五八五年。その五年後には秀吉公の小田原攻めの際に関八州への移封を命じられて、鄙びた村であった江戸へ移られ、ここから江戸の都市造りに取り組まれます。大関東平野の玄関口を選ばれた見識は大変なものです。

この駿府に於ける五年間、公は五方国の経営と戦禍からの再建に力を傾けつつ駿府城の改修も行わ

れて天守閣が初めて建設されましたが、その規模等は明確ではありません。

駿府城の大改築(と言うか大新築)が所謂「天下普請」として行われたのは、家康公が將軍職を秀忠公に譲り、一七年ぶりに三度目の駿府へ大御所として移られた一六〇七年からで、七層の天守閣は日本歴史上最大のものでした。

この大御所の時代、公は内政を江戸の秀忠公に行わせ、御自身は駿府の地で主として国際問題を処理される、所謂二元政治体制を取られます。朝鮮国との国交回復・拉致されて来た朝鮮の人々のうち帰国を希望する人々の送還。イギリス人三浦按針を起用しての西欧の使者との面接など、長い戦乱の後の世界の中の日本のあるべき姿を造る

努力です。この頃駿府の人口は約十万人となり、世界十指に入る大都会の一つであったと云われています。(シェイクスピアが次々と作品を発表し、イギリス人の設立した東インド会社がインドで交易を始め、アメリカ大陸に最初に造られた白人の居留地ジェイムズタウンの人々が病氣と飢えに苦しみ、インディアン酋長ポカホンタスに助けられ…それまでバラバラだった世界が、何か新しいエネルギーで動き出したのもまさにこの時代です)

戦乱の時代に終止符を打ち、新しい日本を造ると同時に広く世界を見る眼を開かれた家康公が亡くなられてもうすぐ四百年になります。静岡市を中心として浜松市、岡崎市も加わって、もう一度日本のこれから進むべき道の家康公の壮大な視野に学びつつ皆で考える時が来るのだと思っています。